

左股になぎ落ちていた。

左股を下りながら取付き点に目をこらすと、居るではないか！ 三々五々取付き点に向かって黙々と登っているクライマーの姿が。それは何十年の時空を超えた世界でありバットレスの静寂の中に展開されていた。

一橋山岳部のハイマートである北岳バットレス。出来ることならいまいちど登ってみてみたいと考えている。

## ヒマラヤ紀行

遠藤 晶土（昭37年卒）

11月3日 バンコックへ

8時45分、成田集合。16人と添乗員、計17名のツアー。男性8名。女性9名。最初は針葉樹会で、一グループ作る筈が、一人欠け、二人欠け、結局は小野氏と私の二名になりツアーに合流となったのだ。女性のうち6名はJ女子大山岳部OG。

11月4日 バンコックからカトマンズへ

カトマンズ着。いきなりの雑踏に驚く。カトマンズの「ホテル・ヒマラヤ」は庭にも神経の行き届いた綺麗なホテル。この経営に参画していた三森氏の手配で、社主にしてかの「ホテル・エベレスト・ビュー」を立ち上げた宮原社長にも挨拶でき部屋へ。

ここで、明日からの荷物を三つに分ける。  
①ホテルに残すもの ②ポーターに預け、ロッジで受け取るもの ③雨具、水等自分で担ぐもの。この②が初めての経験。ヒマラヤに來たと実感が湧いていい気分。

11月5日 カトマンズへ

ルクラ、パグディン

未明にカトマンズ飛行場。20人乗りの軽飛行機でルクラへ。ルクラ飛行場で我々を待ち受けるポーター？の人の多さ。トレッカーの多さ。その荷物を運ぶ動物の多さ。この動物は、ヤクでもない、牛でもない、「ゾッキョー」というのだ。その糞の多さ。空港第一歩で早くもビツクリする。とりあえず今日はドウードコシ河まで200mの下り。来る前に読んだ「参考書」にあるように、トレッカー、ゾッキョーとの頻繁のすれ違い、追い抜かれ。ただ、歩く道は現地の人々の生活道路であって、山道ではない。のんびりと13時30分、今夜の宿、パグディンのロッジへ。

外見こそ貧弱だが、二人部屋のロッジは快適。少し散歩。ドウードコシに落ち込む支流沿いの集落だが、その石垣は実にしっかりしたもので、日本の城郭の石垣を専門に研究する私は大いに満足した。

11月6日 パグディン、ナムチェ・バザール

6時、モーニングコールの代わりに一杯のお湯が各部屋に配られる。朝食はおかゆ。丸美屋のふりかけさえ用意され驚いたが、これは添乗員氏が用意したもの。お酢の物までついて、昨夜の夕食の凝った献立とともに我が日本の山小屋の食事と比較してしまう。

今日は恐らく、今回のトレッキングの山場。標高差は600mだが、上り下りのある約6時間の行程に少し緊張。しかし、歩き出せば、例の「生活道路」を歩くのだからまさに「トレッキング」だ。

ここいらになると、日本人のトレッカーの数が減り、我々を楽々と追い抜いていくグループは殆ど外人。なにしろ彼らはコンパスが長いもんネー。老若・男女、息が上がっている老婦人さへ、「ナマステ」「ボンジュール」「グウーテンモルゲン」「コンチハ」「ハラシヨ」(これは嘘なんて言いながらトクトコ上り下りしている。そんなに急いで「高山病」の心配はないのだろうか。

「高山病」の心配はこのトレッキングの最大のテーマだ。針葉樹会員以外で、このツアーに誘った人達の断りの理由は全て高山病だった。ツアーの主催者も参加者が高山病にならないよう、細心の、私に言わせると、過剰と思うほどの注意をしてくれていた。自己暗示にかかってしまうのじゃないかと思うほどだ。だけど、今のところ心配は高山病よりむしろ「トイレ」のような気がする。トイレは茶店毎にある。あるが、戸がなかったり、穴に板を渡しただけだったり、一つしかなく長い順番を待ったりだ。道は断崖のへつりや、狭い尾根道。ジグザグの上りでも物陰に乏しく、男性でも苦勞する。

橋を幾つも渡り返す。外国の援助で架かる橋は、堂々たるワイアー製で、いざとなればゾッキョー隊とすれ違う事さえ出来る。

16時近く、ナムチェ・パザール着。「パザール」は伊達ではない。既に撤収を始めていたが、市への出店数は半端ではない。誰が、誰に売るのでろう。宿に落ち着いた後、小野氏と散策。観光客相手の店が石畳の急坂の両側に数十軒。坂に交差する路地にも商店が立ち並ぶ。ヤクの毛のジャケット、2500円。買いたいけど、ルピーを持たない。こういう時も、小野氏は力になる。「貸してあげるから買っちゃいなさいよ」。本当に彼にはお世話に

なった。朝起きた時から寝る時まで……だけではない。寝ている間も私のいびきに文句一つ言わずに我慢してくれる。

11月7日 ナムチェ

ホテル・エベレスト・ビュー

8時出発。いきなりの急登。このツアーには宮原氏の後輩、つまり、日大山岳部出身の添乗員の他に、日本語ペラペラのシエルバが二人、更に女性のガイドが先頭と中間に配置され万全の体制だ。女性のガイドは流石に超ユックリのペースを崩さない。だから、誰も遅れる者はいない。9時、一瞬、雲の間に「タムセルク」とシエルバ。男女共々カメラ、カメラ。

そんなノンビリでも11時にはホテルに着く。累々たる石垣。広々とした窓ガラス。どれも1982年の発行時に読んだ宮原氏の名著『ヒマラヤの灯』に書かれた苦勞を思い起こさせ、なんの苦勞もせずに利用させて頂くことが申し訳ない気持ちだ。

見事な和食の昼食を済ませ、小野氏と中島寛氏のお墓参りに行く。山本尚偵先輩に詳細な地図を頂いていたが、更に念を入れてホテルのアンヌル君に案内を頼む。

中島先輩の墓は今日は雲で見えないがエベレスト始めヒマラヤの山々が一望に見える場

所なのだろう。一人で淋しくないかと一瞬思うが、今は普通の人でさえ、千の風になってお墓にいない時代だ。超人の中島先輩のことだ。万の風、億の風になって、世界中、いや、宇宙を駆け巡っているだろう。お目にかかって、お話を伺う日を楽しみにしております。

暖房は効きませんと三森氏から念を押されてきたが部屋部屋個々にヒーターが入って、湯たんぽもあつて快適だ。

夕食後、クンデピーク登頂希望者全員の「体内酸素量チェック」が行われた。人差し指でチェックすると、私の周りにはほぼ70台。高山病に罹らぬためには100が理想で、80以上が望ましく、不足者はホテルの酸素吸入を勧められる。

「あわや、4200mのピークに行けず」

「小見出しはこうなりますね」と小野氏が言う。

酸素は、持参した酸素製造機利用で数値を上げて、再チェックに合格し、明日の登頂に参加許可を得た。

11月8日 クンデピーククンデ村

朝、小野氏と二人で外へ出る。オー！雲が切れた！アマダプラムだろうか。朝日に輝く岩と雪。「法悦と歓喜に満ちて、山々は、今、明けんとす。君見ずや東の空を！」期せずし

て(W・P・でない)二人は我が山岳部の部歌「讃山譜」を唄う。久しく部OB総会の宴会場でしか唄わなかった部歌だ。最高の舞台で「讃山譜」の歌詞が改めて光り輝く。

例によって、豊かな和定食の朝食をすませ、8時出発。今日は気紛れな雲との戦い。どこであろうと、雲が切れた時が休憩時間。写真の時間。山の名を覚え切れない私はスカイラインをスケッチして山名を書き入れていく。ピーク38、タムシエルク、カンテガ、アマダブラム、ローツエ、タブチエ……。そして、彼らが雲に覆われると出発。なにしろ、ユツクリ登ることが目的。しっかりとした山道をゆつくりと登る。

尾根はどこまでも高く登って行くが、我々は「4200m」の標識があるところで予定通り引き返す。のんびりとクンデ村へ。例によって茶店でおいしいミルク・ティーなど喫している間に散策組4名と合流。観光名所?のイエティの頭骸骨?に参拝。村外れの軒家の二階で子供の泣き声がする。先頭で案内のシエルパの子供が父親をみつけ、後を追って泣いているのだ。

星空。降るような星空。これも見たいもの一つだ。昨夜も夜中時々起きてみた。アッ、星空!部屋の電気を消してもう一度

テラスに出たときはもう、雲がかかって見えない。それが、今夜は4時頃満天の星!小野氏を起こしても大丈夫。二人で首が痛くなるまで見た。

#### ホテル・エヴェレスト・ビュー・カトマンズ

そして、最後の朝。昨夜の晴天が続いて、いよいよ、このホテルの誇り、ヒマラヤの山々の展望がその全貌を現した!エヴェレスト、ローツエ、アマダブラム、タムシエルク、タブチエ。ここでは、エヴェレストを賛美すべきだろうが、遠いエヴェレスト、ローツエの名山もよいが、目の前のタムシエルクやタブチエの圧倒的な岩壁に目を奪われる。そして、アマダブラム。ソフトクリームを一匙削ったような特徴ある山の姿は、昨日から度々その姿を見せてくれたので一番身近に感じる山だった。

この朝、山々は長い間雲に隠れることもなく、集合写真も落ち着いて十数台のカメラで撮ることが出来て、全員、大満足。添乗員氏も安心。それでも、迎えのヘリコプターの時間に合わせて、7時にはホテルを出て少し下った飛行場へ。

間もなくやってきたヘリコプターに分乗して……と、そうは上手くいかないのが山だ。ここは晴天でもヘリの出発地の天候が悪い

由。いつくるか分からない。待合室にも火の気がないから寒い。下着二枚、トックリのセーター、シャツ、ダウンウエア、例のヤクのジャケット、最後に今まで袖を通さなかったゴアテックスの雨具まで着込んで計七枚。

そうこうして、結局、昼頃、下の天候も良くなつて、ヘリが飛ぶことになった。飛び出せば早い。ルクラまで10分。4人乗りのヘリがピストンで忽ち全員を(いや、正確には4人はカトマンズまで帰るヘリに乗ったままだったけど)運ぶ。ルクラから往路に使った飛行機でカトマンズ。喉元すぎても暑い土地に無事帰ってきた。

#### カトマンズ・バンコック・成田

今日の日程はノンビリ。朝食の小野氏と私の席に宮原氏が同席してくれる。雲の上の人。緊張するが、話がホテル建設時の資金繰りの苦しさや及ぶと雲が切れて、彼が身近になり、金融機関の悪口を言っただけで、宮原氏は我々二人の相手を済ますと、J大OGのグループに席を移してコーヒーを。見事な社長振りと感心。

成田では、解散式もなくいつの間にか一人となる。京成で日暮里駅。そこで、J大OGと所沢まで一緒になり、いろいろ話を聞く。曰く、「宮原氏の夫人と私達は大学同期。二人

のナリソメは、ウンヌン・カンヌン」(だから、宮原氏は彼女達に表敬したのか)。「毎年一回は外国の山に行くことにしている。昨年はインドネシアのナントカ・カントカ。キリマンジェロ? 4、5年前に行った。カクカク・シカジカ。あら、所沢。では、お元気で。」サヨウナラ。

## 会稽山と天台山

高橋 信成(昭38年卒)

二年近く前の二〇〇五年二月に中国の会稽山と天台山に登る機会があった。勤務していた会社の山好きなひと二人と同行し、三人連れであった。

### 会稽山かいけいざん

二月十六日成田から上海へ飛び夜中にホテルに到着した。十七日には預園や会社の上海事務所へ寄り、その後市内を見物したりして翌日の無錫行きの列車の切符を買ったりした。それまで中国には三回ほどいつていたが、

習っている中国語に自信がなく、ツアーに参加していたが、今回はガイドなしで自分たちだけで行くことにした。そのため列車の切符も自分で買いバスやタクシーも小生の拙い中国語で何とか過ごした。

無錫では、はじめに太湖の仙島へ行き島内を見物した。老子の大きな銅像が印象的であった。市内に戻って錫恵公園をおとす。ここは昔、銅を産出していたが、銅が取れなくなったので無錫という名になったという。

十九日に上海から列車で紹興へ移動した。紹興酒で有名な紹興である。紹興は春秋時代に越国の都が置かれたところで、越王勾践が呉王夫差に敗れて臥薪嘗胆したところと伝えられる。勾践が身を隠したところが会稽山といわれる。

会稽については、司馬遼太郎が「街道を行く十九」で「会稽」という地名は、ときに山名を指し、ときにこのあたり一帯の野や浜を指す。「会稽郡」という郡さえ、秦代におかれた。漢がこれを継承するのだが、春秋の呉越を含めるほどの広さがあり、以後呉越の故地を「会稽」とよぶ場合が多かった」とある。

会稽の意味としては評議判定するというところで呉越時代の戦乱に関連して論功行賞を行ったとする説があるが、小生が思うには、水河時代の後、一万年から数千年前、海水水

位が上昇して現代では海となっているシンガポール・インドネシア・ボルネオ等の中間にある陸地であったところが、海となって住めなくなり中国南部方面へ移動したため、大陸の先住民と後続の移民との間の戦乱の際の論功行賞ではなかったかという説に傾いていきます。

紹興の駅に到着したときは、以前読んだ古い本の先入観で、紹興酒の匂いがすると思っていたが、駅舎や酒造工場も近代化されたせいか、酒の香りはしなかった。駅前には到着した旅行者をタクシーに勧誘するものやホテルを紹介しようとする人が付きまといてきてしばらく離れなかった。われわれは時間の都合で先ず会稽山に登ってから市内を見てその後で日本で予約してあったホテルに行くことにしていた。

会稽山へ行くバスを見つけて麓まで行く予定だったが、終点まで行ってしまったが、バスが戻る時にちよつと手前の麓の公園入り口で下車することができた。

五十円で「会稽山百鳥楽園」という公園の入場券を買って中に入り、会稽山頂の見えるほうに歩いた。登山口の下に禹陵という約四千年前治水を行い夏王朝の創始者といわれる伝説上の人物である禹王の陵墓がある。バスを降りてからおよそ五百メートルである。そ